

第29回歯科保健医療国際協議会 (JAICOH)

学術集会抄録集

テーマ

本音で語ろう国際協力

学会長

中村修一

会場

福岡ガーデンパレス

会期

2018年6月30日・7月1日



目次

プログラム

大会長講演抄録

特別講演抄録

ポスターセッション抄録

プログラム

総会および大会

◆ 6月30日（土）

受付開始：16:00 福岡ガーデンパレス 3階ロビー

1. 理事会：16:30～17:30 福岡ガーデンパレス 3階「宝満」
2. 開会：17:45 福岡ガーデンパレス 3階「宝満」
3. 大会長講演：18:00～19:00 福岡ガーデンパレス 3階「宝満」
ネパール歯科医療協力会 30年をふりかえって
ネパール歯科医療協力会 理事長 中村 修一
4. 懇親会：19:15～21:15
福岡ガーデンパレス 1階「ガーデンホール」

◆ 7月1日（日）

受付開始：8:30 福岡ガーデンパレス 1階メインロビー

会場：福岡ガーデンパレス 1階「ガーデンホール」

5. 特別講演 9:00～10:00
ネパール歯科医療協力会とともに歩いた20年
ネパール NPO 法人ウェルビーイング代表 アミット・カナル
6. ラウンドテーブルディスカッション：10:10～11:30
「本音で語ろう！国際協力！」
テーブルディスカッション内容：ファシリテータ / タイム
キーパー
RT1 Plan DO See：矢野裕子／柏木伸一郎
RT2 学生の参加を考える：樋口惣／重田幸司郎
RT3 良かったこと・困ったこと：麻生弘／根木規予子
7. ポスターセッション 11:40～12:20
8. 総会：12:30～13:00

大会長講演

ネパール歯科医療協力会 30 年をふり返って

ネパール歯科医療協力会

中村 修一

1989 年に開始したネパールでの国際保健医療協力は今年で 30 年を迎えた。ミッションの編成や運用に当たってはヒマラヤ登山隊の運用戦略を応用した。目標の山を設定し装備を揃え現地に輸送し登山活動に従事し、帰国後反省会を開き報告書を発行する手法や手順は、plan-do-see を導入する国際協力事業に応用できた。

その結果、22 のプロジェクトを展開したが、成功した案件は 13 プロジェクト 59.1%。失敗した案件は 9 プロジェクト 40.9%であった。活動開始から 5 年間は、現地政府のリクエストにより歯科診療だけを実施し村人との信頼関係を構築した。1993 年にテチョー村にテチョー村ヘルスプロモーションセンター（HPC）を建設した。同時に外務省の支援により四輪駆動車を入手インド経由でカトマンズに持ち込んだ。この他 HPC の隣に給水塔、発電室、トイレを建設した。活動拠点と移動手段が整った 1994 年からヘルスケアを始めた、毎年新しいプロジェクトを開発した。歯科診療班は途上国における歯科診療の指針をまとめた。

ヘルスケアを始めるに当たっては口腔保健専門家の養成プロジェクト（ヘルトレ）を同時にはじめた。ラリトプール郡 40 の小学校から延べ 851 人の先生が口腔保健専門家養成コースを受講した。その結果、現在 7,456 人の小学生がフッ素洗口を実施している。

最近は、2015 年のネパール地震で傷ついたこどもの心の癒しプロジェクト、母子保健班による保育所の口腔保健をマザーボランティア

イアグループが取り組むプロジェクト、ゴダワリ市とのコラボレーション事業、高齢者歯科保健など多くのプロジェクトをネパール人口腔保健専門家により展開する自立型事業を開発中である。今回はネパールにおける 30 年の変遷について報告したい。

特別講演

ネパール歯科医療協会とともに歩いた20年

20 years I spent with the Association of Dental Co-
operation in Nepal

Amit Khanal

NPO 法人 Well-being Nepal 代表

ネパール歯科医療協会(以下、ADCN と省略)は30年前、ネパールのラリトプール郡のテチョー村とその周辺のいくつかの村で歯科診療をはじめた。現在は学校歯科保健、口腔保健専門家養成

(Oral

Health Training) およびフッ素洗口など、活動は Health Care に変化した。その長い間、日本人とネパール人の心温まるつながりがあった。そして、ネパールのラリトプール郡の村人は、自分の健康のために正しい口腔ケアの知識を学び、口腔ケアができるようになった。

Well-being Nepal は、口腔状態があまりよくない他のネパールの人々に30年間活動したこの医療モデルをひろめたいと思っている。

私は今から20年前ADCNを知り一緒に活動して来た。今回、私がネADCNとともに歩いた20年について講演する。

1. ベトナム児童保護施設でのフッ素洗口普及活動

○田畑けいこ・陶山恵・栗田大輝・山口かおる・三木由貴・村木利彦

NPO 法人歯科ネットワークー岡山から世界へー（通称 DNOW）

我々「NPO 法人歯科ネットワークー岡山から世界へー」は、2010年よりベトナムの NGO「ストリートチルドレン友の会」FFSC（FRIENDS FOR STREET CHILDREN）と協働し、ホーチミン市の児童保護施設で年二回の歯科検診と歯科治療及びヘルスプロモーションを行ってきている。継続的に訪問しているものの、訪問頻度の少なさや社会的背景もあり、子供達の虫歯を大きく減少させるには至っていない。今回 FFSC の施設内で、継続したフッ素洗口を開始する新しいプロジェクトを開始したので報告する。

Promotion of Fluoride Mouth-Rinse at an Educational Facility
for Social Handicapped Children in Vietnam.

○ Keiko Tabata¹⁾, Megumi Suyama¹⁾, Daiki Kurita¹⁾,
Kaoru Yamaguchi¹⁾, Yuki Miki¹⁾, Toshihiko Muraki¹⁾,

1) Non-profit Organization Dentist Network from Okayama to
the

World(DNOW)

【Outline of this project】

We have been in continuous activity at “Friends for Street Children(FFSC)”, Vietnamese NGO, twice a year, from 2010. These activities have been and will be on cooperative relationship between FFSC and DNOW. We hold health promotion program including TBI, in addition to checking up and treatment during these activities every time. Unfortunately, our 8 years’ activity couldn’ t decrease children’ s teeth decays very much due to factors such as low activities’ frequency, social background, and so on. We’ ll report the new project for regular fluoride mouth-rinse in the FFSC’ s facility.

2. ネパールでのフッ化物洗口 25 年間の歩み

○矢野裕子、蒲池世史郎、深井穫博、中村修一、柏木伸一郎、重田幸司郎、平出園子 (ネパール歯科医療協力会)

目的：ネパール歯科医療協力会では 1994 年からネパールでフッ化物洗口を実施してきた。洗口実施に先立ち、対象地域の生活実態調査や学校での口腔内検診を行った。その結果、都市化に伴う砂糖摂取の増加とそれに伴うう蝕の増加が懸念された。医療環境が整っていない途上国では、根拠の高いう蝕予防処置が必要であると思われた。

方法：0.2%フッ化ナトリウム溶液による週一回法を実施している。活動当初は、洗口液を配布していたが、洗口人数が 1000 人を超えた頃から薬剤を各校の洗口人数に合わせて 10g 単位で計量し、2 週間に 1 度各校へ配布している。

結果：1994 年に一つの村の一枚から開始されたフッ化物洗口は 2018 年現在、9 つの地域 40 校 7546 人に対して行われている。

2009 年に実施した学校歯科保健プログラムを実施している村と実施していない村との断面比較では、永久歯のう蝕歯数に差があり、このプログラムがう蝕予防効果に有効であることがわかった。

考察：

25 年間の経過から、本プログラムは、学校歯科保健活動の中でも、現地教師が取り組みやすいことがわかった。現在では、現地の口腔保健専門家に運営を担ってもらっており、現地の歯科医師が見守るという体制ができつつある。一方、洗口開始から年月が経ち、一部の学校では、管理簿の記載漏れや、洗口法の間違ひも見られた。安定したプログラムの継続には、定期的な管理、評価を現地の人々共に行う必要があると思われる。

3. トンガ王国学童の口腔保健向上のための ‘MaliMali’ Program の評価

Evaluation of the child oral health promotion ‘MaliMali’ Program based on schools in the Kingdom of Tonga

竹内麗理^{1,2}, 遠藤真美^{1,2}, 河村康二^{2,3}, 河村サユリ^{2,3}, 内田千鶴^{2,3}, Fifita Sisilia^{2,4}, Fakakovikaetau Amanaki^{2,4}, 有川量崇¹, 田口千恵子^{1,2}, 野本たかと¹, 平塚浩一¹, 小林清吾^{1,2}

¹ 日本大学松戸歯学部, ² 南太平洋医療隊, ³ カワムラ歯科医院, ⁴ トンガ王国パイオラ病院

南太平洋医療隊はトンガ王国小学校・幼稚園において 1998 年から 20 年間にわたり, 主に学童を対象とした口腔保健向上のためのプロジェクト ‘MaliMali (トンガ語で笑顔の意)’ Program を実施している。本研究では RE-AIM (Reach, Effectiveness, Adoption, Implementation, Maintenance) framework を用いて, MaliMali Program を評価した。

対象学童数は 2011 年にはトンガ全体の 99% に到達した (Reach)。12 歳児 DMFT scores は 2001 年 4.86 から 2011 年 2.20 に減少した (Effectiveness)。対象施設数は 2011 年にはトンガ全体の 99% であった (Adoption)。実施費用は一年間一人当たり, 最大 2.0 USD (主に MIRANOL[®] 及び ORA-BLISS[®]) と安価である (Implementation)。MaliMali Program は南太平洋医療隊, JICA, トンガ王国健康省およ

び教育省の協同事業となった (Maintenance)。

上記の要因により, MaliMali Program はトンガ王国全土で受け入れられ, 確実に効果を現し, 現在はトンガ人のみの手によって独立したプロジェクトとして実施されている。

4. ミャンマーの医療に恵まれない人々へ

— 口からの健康作り —

○松本敏秀、久保田順子、Sai Htay Win

アジアのこどものデンタルケア（福岡市）

1) はじめに

ミャンマーは民主化に政策転換したとはいえ、依然として過去の負の遺産に苦しんでいる。国として公的な医療保険や福祉の制度もなく、とくに国民の多くが暮らす山岳部や地方では、都市部との経済格差が拡大し、流通網や電気や上下水道など社会的インフラの整備も遅れ、衛生状態も劣悪で、多くが無医村である。我々は、孤児、障がい児（者）、有病者や少数民族など、医療に恵まれない人々への歯科治療や口腔からの疾病予防に、2011年5月より取り組んでいる。今回はその活動の一部を紹介する。

2) 目的と目標

「ミャンマーの問題は、ミャンマー人の手で解決する」ための手助けすることを目的とする。一過性の活動に終わることなく繰り返し訪問し、最終的には、ミャンマーの歯科医師に、また予防に関しては医療関係者にとどまらず教師、施設や地域のリーダーなどにも引き継ぎ、活動を継続してもらうことが目標である。

3) 活動の内容

① 歯科医師対象に歯科臨床に関する研修会開催や治療器材などの支援

② 無歯科医師地域でのチャリティー歯科治療

③ 「虫歯にしない3つの約束」の紹介と実践

簡単に、シンプルに、だれでも続けられるう歯の予防

④ 「病気になる4つの約束」の紹介と実践

金や薬を使わず、楽しく口からの感染症を予防し、健康をめ

ざす

5. ラオスにおける看護師を介した歯科口腔保健サービスの構築と全国展開 第3報

○谷野弦^{1,2,3}, 持田寿光³, 久家理恵³, 押元敦³, 渡辺一騎³, 宮田敦³, 佐藤緑³, 佐藤貴映³, 高山史年³, 小峰一雄³, 宮田隆³
¹名戸ヶ谷病院, ²日本大学松戸歯学部口腔外科学, ³歯科医学教育国際支援機構(OISDE)

【緒言】歯科医学教育支援機構は2012年より日本NGO連携無償資金協力事業(外務省)に採択されラオス人民民主共和国にて口腔保健の教育システムを確立すべく活動中である。ラオスにはデンタルナースの制度が無いため喫緊の措置として、全国の市町村に点在するヘルスセンターの一般看護師に技術移転を行い地域住民の歯科口腔保健を管理できる体制を目指した。

【活動内容】モデル事業を行う地域をビエンチャン県ポンホン地区に設定した。第1フェーズでは、県の看護学校に歯科口腔保健のカリキュラムを導入し、デンタルナースの代替となりうる人材が恒久的に輩出される体制を構築した。第2フェーズでは、当該地区への歯科口腔保健サービスシステムの導入(地域住民に対する健診やスクリーニングを含む簡単な歯科治療を通して一般看護師および看護学生に技術移転)を行った。第3フェーズでは、ポンホン地区での実績を踏まえ、看護学校を有し環境の異なる他県への事業展開を行い、第1・2フェーズで構築したモデルの検証を行った。

【結論】モデル地区の看護学校に歯科口腔保健のカリキュラムを導

入し、またすでに配置されている一般看護師に対してはワークショップならびに実地指導を行い、看護師がデンタルナースの役割を兼務するシステムを構築した。今後は全国展開をさらに進めて行く。

6. 「モンゴルにおける歯科予防活動と歯科医師研修の取り組み」

○黒田耕平 日本モンゴル文化経済交流協会

モンゴルとの歯科医療交流は、1991年7月から今年で27年目になる。長期にわたる交流では、コンセプト「モンゴル人の健康はモンゴル人自身の手で」は変わらないが、現地の様々な変化と共に交流活動の内容も変化してきている。5年ほど前には現役歯科医師数は1200人程度であったのが、現在では歯科大学も5校となり数年後は毎年の卒業生も800人を超えると言われる。しかし、増加する首都の開業医は経済的理由からか高額私費治療を中心とし、公的な歯科予防の取り組みもまだまだ遅れている。小児のう蝕も首都から郡部へとさらに増加し続けている。

我々は、現地のエネレル歯科診療所とともに、首都ウランバートル市と郡部での小児う蝕予防活動を継続して行っている。幼稚園と小学校を対象に、歯科検診、歯磨き指導、フッ素塗布、人形劇、教師や保護者への予防講話、初期う蝕処置を、モンゴルの歯科関係者や行政の健康保護局と一緒に行うことで公衆衛生を進めてきた。

しかし、大学における歯科学教育は2年前までは5年制で、費用の掛かる模型実習はほとんど行われておらず、郡部に新卒で赴任する歯科医師などは満足な臨床研修もないまま重症う蝕患者の歯科治療を一人で行うという現状がある。そこで、我々は歯

科大学における臨床セミナーと実習、郡部で歯科医師への実地臨床研修にも取り組んでいる。

また、モンゴルにおける障がい者歯科治療のために、医科大学小児歯科での治療やセミナー、地域の歯科医師とともに障がい者施設での訪問診療も行っている。

今回は、そうした歯科予防活動や歯科治療研修の取り組みについて報告したい。



郡部での歯科治療研修



郡部の小児う蝕



乳歯冠の模型実習

2017年9月7日ウランバートル市内第210幼稚園検診結果

4歳児68人

Caries free	罹患者数 (率) (C2以上)	C2数	C3数	C4数	う蝕喪失歯数	1人平均 う蝕歯数
7人	61人 (89.7%)	409本	12本	11本	1本	7.1本 (61人)

黒田耕平 神戸医療生協・生協なでしこ歯科 日本モンゴル文化
経済交流協会

E-mail ; hpdqm355@yahoo.co.jp

Tel. 078-978-6480

Fax. 078-978-6056

7. ベトナム名誉領事館を設立

○夏目 長門

- 1) 愛知学院大学歯学部口腔先天異常学研究室
- 2) 在名古屋ベトナム社会主義共和国名誉領事館
- 3) 特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会
- 4) 特定非営利活動法人日本医学歯学情報機構

ベトナム社会主義共和国は、人口 9270 万人、面積は日本とほぼ同じ 32 万 9, 241 平方キロメートルである。

ベトナムでの医療協力は、1992 年より開始され、これまでに 1200 名を超す日本人医師、歯科医師、看護師、歯科衛生士をはじめとするボランティアが参加して、ベトナム各地で口唇口蓋裂の無償手術をはじめとする各種の医療協力がなされました。

医療協力を通じて現地の方々との深い絆が生まれ、今ではベトナムを第二の故郷と思うほどになっています。口唇口蓋裂をはじめとした草の根の交流は両国政府を動かし、名誉領事館が設立され、名誉領事として各種の交流のお手伝いをさせて頂いています。

医療協力を通して多くの出会いがあり、友を得ることができました。今では、心より多くの方々に医療協力は、人として自身を見つめ、多くの経験を得ることができることを確信しました。多くの方々が医療協力に参加されることを願っています。

8. 国内の診療で活かす国際協力経験

～増加する日本在住外国人患者の傾向と対策の検討～

○藤瀬多佳子

きし哲也歯科医院

緒言：福岡市の国際化および勤務する歯科医院が九州大学伊都キャンパスに近いことが相まって、留学生を中心とした外国人患者が年々増加している。過去に JICA 海外ボランティアとして南太平洋トンガ王国で2年間、パシフィックパートナーシップおよび NGO の一員としてベトナム、カンボジア、スーダンで医療支援活動に携わった経験は、外国人患者の背景にある文化や生活習慣に考慮した治療を行う上で大変有用であり、当院の2017年の年間新患数における外国人の割合は10% (59名) に達している。今回、当院を受診した外国人患者の口腔疾患の傾向と対策について検討を行ったので報告する。

対象と方法：2011～2017年に当院に新患で来院した32カ国、199名(女性78名、男性121名)の外国人患者の主訴、口腔内の状況、診療内容について検討を行った。

結果：患者の平均年齢は、 27 ± 8 歳で、紹介率は80%だった。新患の主訴の内訳は歯の疼痛が34%、歯周病の症状が24%だった。歯の疼痛が主訴の患者の49%が歯内治療を、28%が抜歯処置を必要とした。小児患者では低年齢児の多数歯重症う蝕が認められた。

考察：異国の地で受ける歯科治療は不安を伴うため、症状が重症化して歯科を受診する傾向がみられた。外国人患者の歯科治療に携わる際は、宗教や文化、将来的なフォローを考慮し、更に口腔衛生に関する情報提供を提供していく必要があると考えられた。国際協力活動を通して得られる見聞は、日本在住外国人患者の治療においても役立つと考えられた。

9. ネパール歯科医療協力会の母子保健活動の 30 年の歩み

The 30-years history of maternal and child health activities of the Association of Dental Co-operation in Nepal

○ 白田千代子、奥野ひろみ、大野秀夫、根木規予子、深井穂博
中村修一、上村沙紀子 (ネパール歯科医療協力会)

母と子は、人類の未来であり母子保健は生涯健康の基盤づくりの時期で、母子を一環と捕らえて、時代と地域の状況のニーズに応じた保健活動が提供されなければならない。母子が健康で、安心に安全な生活を送ることができ、社会に守られながら生活できることが、人類の普遍的課題である。しかし、ネパールだけでなく多くの途上国には、こうした仕組みは存在しないだけでなく、社会基盤の未整備に加え、宗教・慣習の問題、貧困、無知、病気、ジェンダーなどが複雑に影響し、安全な出産さえ望めない状況下にある。このような状況であっても、母子保健活動を推進していくことは、母子の健康を維持増進するために重要である。

ネパール歯科医療協力会 (ADCN) は、30 年前からカトマンズ近郊の現ゴダワリ市 (ラリトプール郡テチョー村) で母子保健活動を実施してきた。その紆余曲折した 30 年間の活動状況について報告する。

10. ネパール歯科医療協力活動に関わる 30 年間のネパール人の生活実態調査から

A investigation for the daily life fact-finding of Nepali villagers, since 30years ago

○ 安部一紀、大野秀夫、蒲池世史郎、深井穫博、中村修一
沢熊正明

ネパール歯科医療協力会 (Association of Dental
Cooperation in Nepal)

ネパール歯科医療協力会は、30 年前の活動の当初から、医療活動と平行して、ネパールの人々の生活実態を知るための調査活動を続けている。その目的は、健康はその人の生活実態に由来し、医療はその人に fit したもので、最終的にはその人の well-being をもたすものであってほしいという願からである。

このため、異なる自然・歴史・文化・宗教・習俗・習慣等を持つ人々の喜怒哀楽や価値観等を知り理解することは必要不可欠な事と考えられた。調査は、日本隊員とネパール人通訳が組となり、村を散策・家庭を訪問し、家の中を見ながら、様々に質問するという形式で実施した。調査項目は、家族構成・カースト・家の経済・教育・宗教・食生活・水・燃料・家財道具・便所・台所・寝室・隣人関係等、多岐にわたる。得られた資料は隊ミーティングで共有し、

医療保健現場で人々に接する時や医療保健計画を立案する時の資料として使った。なお、本調査は専従の隊員がほぼ 30 年間一貫して調査を担当しているため、村とその地域の生活実態の変化を経年的変化として捉えることができるという利点があった。

現在、この地域の村々は新しい憲法の下、新しい市に統合され、以前の自給自足・農村型から都市近郊の新興都市型に移行しはじめている。したがって、人々の生活実態は「下着」に伝統生活、「上着」に都市生活という生活スタイルで生活している。このため、老人問題・若者の流出・乳幼児・学童の口腔ケア等様々な新しい問題も出てきたが、ポジティブにみると、高学歴化・婦人の解放・人材の多様化・行政の刷新等、「新しい資源」も備ってきているので、これらを有効に活用すれば、「人々の、人々による、人々のための健康」が定着するのも夢ではないように思われる。

11. ネパール歯科医療協力会こどものこころプロジェクト

○守山正樹、山田信也、松岡奈保子、上村沙紀子、飯田典子、原田由理子
(ネパール歯科医療協力会)

2015年4月のネパール大地震はADCNの活動地域にも大きな影響を与えた。地震後の活動を考えるべく同年9月に先遣隊が派遣され「地震後、村人が子供の心のケアを求めている」と分かり

「二次元イメージマッピング法（TDM）による対話の支援」を中核とする「こどものこころプロジェクト」が発案された。

TDMとは①特定の話者（対象者・当事者）が関わりを持つ「ある複雑な事象」からイメージ要素を抽出し、②要素を二次元的に配列&展開してマップ（散布図）へと視覚化し、③マップを介して対話する中で、④当初の事象を話者なりに捉え直す（構成・構造化）ことを支援する方法である。「話者」はネパールの子供たち、「複雑な事象」は「地震後の生活」である。アミット先生がネパールから持参した子供たちの作文を検討する作業を2015年11月に行い、イメージ要素として16枚の絵カードを開発した。絵カードを配列する座標軸の台紙の横軸と縦軸についても検討し「まず<ナラムロ、Bad>な思いでラベルを横に並べ、次いで<ラムロ、Good>な思いでラベルを縦に動かす」とマップ作製手順を決定した。2015年末のカトマンズ郊外、ウィリアムズ（W）校及びセントポール（S）校でTDMを実施したので報告する。

12. 2015年ネパール大地震によるラリトプール郡の5か月後の被災状況

Situation report about Lalitpur district

～ Five months after the Nepal earthquake in 2015～

○麻生 弘、大野秀夫、安部一紀、大野陽真、大野慧太郎、安部一紀、蒲池世史郎、深井稔博、松岡奈保子、矢野裕子、根木規予子、白田千代子、柏木紳一郎、山田信也、西本美恵子、中村修一、上村沙紀子、小笠原茉莉子、中村敬子、アミット・カナル、守山正樹、仙波伊知郎、飯田典子、原田由理

(ネパール歯科医療協力会)

2015年4月25日、ネパール大地震が発生した。ネパール歯科医療協力会（以下 ADCNと略）の活動拠点であるカトマンズ南のラリトプール郡においても甚大なる被害が発生した。

ADCNは27年間の活動状況から現在は自立支援型保健活動の総仕上げの段階であったものの、これからのADCNの活動を一変させるような大事件であった。

そこで、ADCNおよびNPO法人ウェルビーイングは、余震がある程度落ち着き、ネパールの雨期末期の2015年9月中旬にADCN29次隊先遣隊をネパールに派遣した。目的は、ラリトプール郡におけるネパール大地震の被災状況および今後のADCNの活動を探るためであった。その調査状況およびADCNのその後の活動の指針について報告する

13. ネパールにおけるネパール歯科医療協力会 30 周年記念セミナー

30th Anniversary Seminar of the Association of Dental Cooperation in Nepal held in Nepal

○大野秀夫、麻生 弘、安部一紀、蒲池世史郎、深井穂博、松岡奈保子、矢野裕子、根木規予子、白田千代子、柏木伸一郎、山田信也、西本美恵子、中村修一、上村沙紀子、小笠原茉莉子、中村敬子、アミット・カナル、仙波伊知郎

ネパール歯科医療協力会 (Association of Dental Cooperation in Nepal)

ネパール歯科医療協力会(以下、ADCNと省略)は1989年にネパールでの歯科保健活動を始めて2018年で30周年を迎えた。ADCN 31次隊(2017年12月～2018年1月)では現地でADCN活動30周年記念セミナーを行った。今回は現地ネパール人が自立したこれまでの活動内容および今後の保健活動の持続について、31次隊での活動を中心に報告する。

14. ネパール歯科医療協会のプロジェクトを支援する総務部の30年間の活動

30 years of activities of the General Affairs Department supporting the project of the Association of Dental Cooperation in Nepal

- 大野秀夫、麻生 弘、根木規予子、深井穫博、中村修一、松岡奈保子、仙波伊知郎、重田幸司郎、樋口惣
(ネパール歯科医療協力会)

国際保健医療協力は、プロジェクトの運営だけでは成功しない。30年間ネパール歯科医療協会（ADCN）の活動が継続できたのはプロジェクトを支える運用部門つまり総務部が非常に有効に機能したためである。

ADCNの活動は短期集中型で多くの隊員で行うプロジェクトで、スタディツアーではなく実行部隊である。活動遂行のために隊員の生活全般の世話をする運用部門つまり総務活動の必要性が出る。総務部のモットーは隊員相互 “楽しく仲良く” である。

今回、プロジェクトを支援する総務部の30年間の活動状況を紹介する。

15. 国際歯科保健医療協力における資源の有効活用「ヒト」 について —ネパールでの経験から—

○中村 修一、大野秀夫、深井稜博、松岡奈保子

ネパール歯科医療協力会

1989 年からカトマンズの近郊の村および、ヒマラヤ山麓の村で
歯科保健や PHC を展開している。日本からミッションに参加した隊
員は延べ 826 人で実数は 247 人内男性 99 人、女性 148 人と女性が
圧倒的に多い。参加数 1 回の男性は 51 人であるのに対し参加数 1
回の女性は 99 人と倍の人数であった。しかし 5 回以上参加男性は
20 名、女性は 10 名と逆の値を示した。女性の方が柔軟に国際協力
を取り組む様子がわかる。平均ミッション参加者は 26.6 回である。
隊員の職業は歯科医師 42.1%、研究者 14.3%、歯科衛生士 14.0%、看
護師、保健師、助産師 2.9%、学生 11.6%、その他 15%であった。
参加者は適当に情報を入手し参加する。これまでに参加者の募集で
困ったことはない。1 次隊で隊の構成に当たって 1) 学生に門戸を
あける、2) 歯科学際的運営をはかる、3) 研究だけを目的とした
行動は認めないと方針を採用し現在も守られている。理念は 1) 自
利、寛容、自己啓発と 2) 利他（隣人愛）でネパールへの協力事業
を展開することにした。隊の運営は全てに隊員の安全と健康を優先
する、そのため隊はプロジェクト部と他に総務部をつくり優秀なス
タッフがリーダーとなった。新しいプロジェクトの実施にあたって
は起案者の情熱を優先しまず実行し後から考える事とした。従って

途中で止めたり、他のプロジェクトに吸収されたりするプロジェクトも多いが実行 7 割考察 3 割でとにかく実際にフィールドでの実行を優先した。その結果、現在では「ネパール人の自立的口腔保健の展開」に発展し日本人は「見守る」状態となっている。今回は「ヒト」について報告する。

16. 開発途上国での調査から考える今後の活動展開

○浅野一磨¹⁾、松浦葵¹⁾、眞木吉信¹⁾

1) 東京歯科大学国際医療研究会

本研究会が原則として毎年行っている海外スタディツアーでは近年、訪問国にて大学生を対象とした歯科に関する意識調査を実施している。それはライセンスを持っていない歯学部学生が現地のできる活動内容は限られてはいるが、卒業後国際保健に携わることを考えている学生にとっては自分たちで質問を考え、アンケートを回収し、集計・分析・考察することは非常に有用であると考えられるためである。意識調査における質問は、「1日に何回歯を磨くか」、「歯磨きの際に使用する補助的刷掃具はなにか」など約10問ある。そこで今回は直近の訪問先であるミャンマー、台湾、モンゴル、インドネシアと、対照国として日本を含めた計5か国の調査結果の考察をまとめたい。また今後どのような活動展開をしていくかについて、少ないながらもこれまでの渡航経験とデータを基にした考察を発表したい。

17. 学生における国際歯科保健活動の実施と継続の難しさ

○伊東紘世¹⁾ 河村忠将¹⁾ 眞木吉信^{1,2)}

1) 東京歯科大学国際医療研究会

2) 東京歯科大学衛生学講座

東京歯科大学国際医療研究会では現在までに17回のスタディーツアーを実施し、アンケート調査やボランティア活動などの国際歯科保健活動を行ってきた。また、国際交流の場としてAPDSAへの参加も行ってきた。他大学にも国際歯科保健・国際交流を目的とした部活・クラブが存在しており、我々の蓄積してきた経験や反省点をそのような活動を実施・実施予定の学生と共有することで、更なる有意義な活動を行うものを目的としている。

その1つとして、現在までにスタディーツアーやAPDSAで実施してきた活動の内容を紹介するとともに、活動を実施するにあたってどのような準備を行ってきたか、どのような組織体制を構築してきたかを共有することが出来ればと考えている。

またこれから歯科学生が国際歯科保健活動・国際交流を安全に実施する上でガイドラインの必要性を感じたため、長年の両活動の収穫として、学生が海外において活動する上での注意事項をまとめたブックレットを作成した。

今回の発表ではそれらの点を中心に、学生の観点から国際歯科保健活動・国際交流活動について述べたいと思う。

18. 国際協力に関する活動に興味のある学生の意識調査～ JAICOH 参加学生と某歯科大学学生について～

○遠藤眞美 1, 2, 3), 竹内麗理 1, 2, 4), 谷野弦 1, 5), 宮田隆 1, 5),
河村康二 1, 2)

- 1) 第 28 回歯科保健医療国際協力協議会 JAICOH 実行委員
- 2) 南太平洋医療隊
- 3) 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座
- 4) 日本大学松戸歯学部生化学・分子生物学講座
- 5) 特) 歯科医学教育国際支援機構、ラオス・ヘルスサイエンス大学歯学部

【目的】

歯科保健医療国際協力協議会 JAICOH に学生の参加がある。国際協力に興味のある学生の国際協力に関する経験や希望、意識などを調査した。

【方法】

第 28 回 JAICOH 学術集会に参加した学生（以下、JAICOH 参加学生）32 人と日本大学松戸歯学部国際保健部の所属学生（以下、国際保健部学生）50 人を対象に、国際協力などに関する独自に作成した無記名自記式のアンケート調査を行った。

【結果および結論】

JAICOH 参加学生のうち 22 人（68.8%）が国際保健や協力に関係

するクラブやサークルに所属していた。国際協力などの経験は JAICOH 参加学生 9 人 (28.1%), 国際保健部 8 人 (16.0%) に認められた。JAICOH が主催している学生研修会へは JAICOH 参加者 8 人 (25%), 国際保健部 3 人 (7.9%) が参加していた。JAICOH 参加者であっても 22 人 (68.8%) が研修会を知らないと回答した。

JAICOH 参加学生や国際保健部の所属学生は国際歯科保健協力に対して強い興味のあるといえるが多くが実際の活動に至っていないとわかった。学生の活動支援として定期的に研修会を行ってきているが、低い参加率で周知されていなかったことから今後は内容や日程などの工夫が必要であると考えられた。

第 29 回 歯科保健医療国際協議会 (JAICOH) 福岡大会事務局

学会長 中村修一 (ネパール歯科医療協力会)

副学会長 守山正樹 (ネパール歯科医療協力会)

実行委員長 大野秀夫 松岡奈保子

実行委員 柏木伸一郎、西本美恵子、麻生弘
矢野裕子、根木規予子、山田信也
重田幸司郎、樋口惣

運営事務局：松岡奈保子 〒819-0384 福岡市西区太郎丸
1-3-10 松岡歯科医院内

TEL092-807-1388 FAX092-807-1391

メールアドレス：info@matuoka.in